

「磁性アタッチメントの基礎と製作上の注意点」

10:00~13:00

講演



日本大学歯学部歯科補綴学第II講座  
専任講師  
永井 栄一

テーブルクリニック



日本大学歯学部付属歯科技工専門学校  
専任教員  
坂口 節子

日本は高齢化が進み平成27年(2015年)には総人口の26%、約4人に一人が65歳以上になると予想されています。厚生労働省と日本歯科医師会が提唱する8020運動により高齢者の口腔内は、残存歯数が増加傾向にあります。その成果は平成23年度歯科疾患実態調査によると、80歳で20本以上の歯を有する割合は38.3%であり、前回の調査結果24.1%から飛躍的に増加していますが、残りの約60%の人の歯は20本しか残っていません。つまり上下顎・左の第二小臼歯から右の第二小臼歯までしか歯が残っていないこととなります。この人達の残存歯の部位や咬合支持の状態は不明で、大白歯部が欠損に至っている場合もあり、義歯による咬合の維持や残存歯の保全を必要とする患者が多いと思われます。このような背景の中、患者さんからの歯科治療への要求は多様化し、機能と同時に審美的な回復を望む患者さんが多く、さらに現在残っている欠損部顎堤の吸収の防止を担う補綴装置が必要であり、歯科医療の従事者はその両者を治療目標とすることも多いです。これら多様化する要求に対し、従来のクラスプによる部分床義歯にかわり、磁性アタッチメント付きオーバーデンチャー(以下、マグネットオーバーデンチャー)の治療が有効な場合が多いです。磁性アタッチメントは、1988年に愛知学院大学歯学部の中村真信教授が中心になり現在日本大学歯学部教授の石上友彦らにより開発されました。当初はサンドイッチ型磁性アタッチメント「マグフィット」が開発され、その後、改良が進み2003年その外形を大きく変更した「ギガウス」が誕生し、現在に至っています。

そして、このオーバーデンチャーはその専門書によると「無歯顎者および総義歯装着者においては、歯根膜の機能がまったく欠如していることが、天然歯列者に比べて致命的な機能欠如である。」と述べられています。マグネットオーバーデンチャーは、生体側からは歯根膜が残存することにより歯槽骨の吸収防止と顎堤の保全、歯冠歯根比が改善された支台歯の保存、歯根膜感覚受容器の保存や咬合平面の乱れの改善など多くの利点を有しています。また、磁性アタッチメント側からは磁石の特性から得られる優れた特徴が多くの臨床家に認められ、一般歯科治療に普及することになりました。マグネットオーバーデンチャーはその特徴をよく理解し、応用すれば長期的に良好な補綴装置として臨床に生かすことができます。それには製作する技工士さんの技術も重要なことは言うまでもありません。

そこで、全都講習会にご参加の皆様が、知っておきたい・押さえておきたい磁性アタッチメントの基礎と特徴を永井講師が講演し、キーパーの製作法(鋳造法・KB法)また「ギガウス」を用いた歯冠外アタッチメントシステムの紹介を坂口専任教員がテーブルクリニックで製作上の注意点について説明します。

「スポーツにおける外傷予防の実際」

14:00~17:00

講演



日本大学歯学部歯科補綴学第III講座  
准教授  
月村 直樹

テーブルクリニック



日本大学歯学部付属歯科病院  
歯科技工士 歯科技工士  
神田 隆司

歯や顎などの口腔内の器官は生命維持に大切な、栄養摂取という役割を担っており、その機能に障害が及べば、満足な身体作りはできません。特に、レベルはどうであれスポーツ選手においては、歯や顎に痛みがあることや、咬み合わせが悪く咀嚼効率が悪ければ、しっかりと栄養を取ることはできなくなり、体力の維持・増進と言うことからかけ離れ、満足な結果は望めなくなります。したがって、我々が、通常より一歩踏み込んで選手サイドに立った口腔内の健康管理を行なうことは、最高のパフォーマンスを発揮させる上でも必要不可欠であると思います。一方、様々なスポーツをする競技人口が増えることにより、怪我也多種多様化する傾向にあります。さらに、技術論の確立や費用対教育などの観点から低年齢化に拍音がかかっています。大人になってからの怪我也、治療にかかる時間や費用の面などで選手自身に負担をかけることとなりますが、発育時のものは、将来の人生に大きな問題を残すことも少なくありません。

スポーツによる外傷のうち、コンタクトがあるスポーツでは全身の約10%程度、口腔領域に発生しております。これらの外傷は、口腔軟組織の損傷のような比較的軽症のものから、骨折や脳震盪など重傷のものもあります。選手達が怪我をすることなく選手生活を全うすることは、選手だけでなく指導者や我々サポートする医療人としても心から願うことです。限られた選手生活の中で不幸にも怪我が起こらないようにすることが、それぞれの選手立場に立ったQOL(Quality of Life)の観点からも重要だと考えます。

今回、私どもはスポーツにおける外傷にトピックスをもち、現在のマウスガードの使用による外傷予防の実際、さらには不幸にして事故が起きてしまったときの現場での取り組みについて講演したいと考えております。

さらにテーブルクリニックにおいて、実際に日本大学歯学部付属歯科病院の歯科技工士の立場から、スポーツ歯科に来院された選手に対してどのようなマウスガードを製作し提供しているか、その製作におけるポイントなどをわかりやすくお教えしたいと考えております。様々なスポーツにおいて外傷予防の観点、そして二次的な効果もきめてマウスガードの着用が増加しております。今後も義務化されるスポーツが多くなると思われることから、明日の技工に直結するようなテクニックや考え方を共有したいと考えております。